
ようとひとつのTRAITOR

cck

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

よつとひとつのTRAITOR

【Nコード】

N7295S

【作者名】

cck

【あらすじ】

二護遠子が裏切り者の娘として田舎を追い出され十二年。

生活のため昼はパート夜は妖狩として過ごす、ゲームをこよなく愛する職業不安定な23歳。

彼氏も欲しい、金も稼ぎたい、ゲームしたい家に籠りたい漫画読み漁りたい。

欲なんていくらでもある主人公の、とあるトラウマを抱えさせやがった妖や、様々な人々と関わっていく話。

いつも通りだらけた毎日を過ごす彼女が引き受けた仕事は、とある

「失せ物」探しの依頼だった。

【作者本人による転載作品】

序章 " ; 失せモノ探し " ; 【一】

季節は夏。

天気予報は気温が下がると言ってみても、熱気漂う雑踏に行くにはちつともあてになりはしないのを人々は知っていた。

せわしなく行き交う人たちは様々だ。大小の店が軒を連ね、雑踏の中に目ぼしいものがあれば声をかける。道端に座る未成年達の嬌声、酔っ払ったサラリーマンには誰も声をかけない。みな目的の場所に向かい、足を止めることもなく、なまぬるい風をはらうように進んでいく。

無機質なビル街を埋め尽くすように覆うのは夜の闇だが、その威力は地表へ近づくほど人工灯におされて薄くなっていく。

どろつとまとわり付くような生暖かい風とネオンの灯りのなか、
津野つの しのぶ春明は歩いてた。

髪はぼさぼさで、スーツもよれっとしていた。

うつむいた表情は暗く、猫背で歩く彼にはキャッチも見向きもしない。

大都会の片隅で、一人孤独にあるく津野はやがて近くの公園のベンチにどっかりと腰を落とした。

手に持った缶コーヒ―は蓋を開けたまま、一口も飲まれていない。

力なくうなだれたまま、にごった瞳を地面に落としていた。

その顔は土気色でまるで生気がない。まだ40代の働き盛りだといふのに、疲れきっていた。

かといつても、肉体疲労で心地良い労働をしたわけでもなさそうだし、精神的に参っていたとしてももう少し輝きがあるだろう。

夜中も暮れたこの深夜に、どうして津野が一人わびしくうなだれているのかというと、端的に言えば彼には仕事がないのである。

勤めていた会社が不況の煽りを受け倒産。親会社に吸収合併され幾人も社員を抱えるのが難しくなった会社が今年、懲戒免職という形で津野を追い払ったのだ。

それ以来無職という状態が半年以上続いている。44歳で仕事が入らないう簡単に見つかるわけもなく、就職活動を続けるも惨敗続き、まさしく人生の袋小路に陥っていた。

津野もニュースぐらい見るから世間の事情は知っているけれど、そんなのは他人事のように感じていた。まさか自分がこんな目に合うなんてと自嘲の笑みを浮かべる。長く長く続く不況は、津野が新しく会社勤めをするにはすでに難しいところまで追い込まれていた。すでに大声で泣き喚く気力も消えてしまっているのである。

仕事は見つからないまま、溜め込んだ貯金はなくなってきた。失業保険だけで家族を食べさせていくには限界があるし、追い込まれた先で借金に手を伸ばしたものの、返済のあてはない。

「死ねば楽になるかな」

ぼつりとこぼしても、ぎよっとさせる発言に足を止める人もいない。だが津野は小さく振りかぶった。いえるのは口だけだ、死のうと思っただけならこんなところにはいないだろう。

結局ままならぬ事態にどうすることもできずにいるしかないのだ。

小さなため息を吐いた津野は、革製の鞆からよれよれになった紙を取り出した。くしゃくしゃになっても破れてる様子はないから、随分丈夫な紙だろう。その端は本から破り取ったようにぎざついていた。

「売れば金に・・・」

もちろん本から破り取ったような紙切れ一枚が売れるとは思っていない。津野もそんな役に立たないものを持ち歩くわけないし、売れるかもなんて思ったのにはワケがある。

津野が両手を使ってびりつと紙を破いたのである。綺麗に二つに裂けた紙切れは、ゴミ箱へ直行かと思われたがそうではなかった。

破いた部分同士をぴたりとくっつけると、元通りになったのである。裂いたようなあともなく、しわくちゃだった紙はアイロンをかけたシャツのようにピンと張りを持ち直している。

これを見つけたのは、本屋である。ぶらぶらと意味もなく街を徘徊しているとき、なんとなく古書店に入った。古本らしく適当な小説を買ったのだが、最後のページに丁寧に折りたたんで挟まっていたのである。

発見したのは偶然だったが、はじめこそ子供のいたずらだろうと苦いたため息を吐いていた。

その理由は簡単で、ページにはなにやら津野には読むことのできな文字で、漫画でよくある円を描いた図形が描かれていたからである。

暇つぶしで目を通してみると、子供のいたずらにしてもインクは古いし、紙も現代の製法にあるような手触りとはまるで違う。図形も、みっちり手の込んだつくりだったのだ。

薄気味悪いから捨てようと思ったが、今も持ち歩いている。もしかしたら呪われるんじゃないだろうかなんて不安に襲われるのだが、そんなことならとつくに津野はこの世にいないだろう。もとより、今より悪いことなんてないに違いない。

ともあれ、こんなところにもいつまでも居るわけにはいかない。

無職という後ろ暗さから家族のもとへは帰りにくいだが、少なくとも布団があつて、雨風をしのげる家は睡眠を約束してくれる。数日家に帰宅していない自分を、家族は心配しているだろうと立ち上がった矢先、津野の肩がびくつと震えた。人が立っていたからである。

「こんばんは」

さつきまで、つい数秒、いや一秒前でも津野の前に人などいなかった。

長い金髪を束ねて背に流している、30をいくらか過ぎた頃の、仕立ての良いスーツ姿の男である。この蒸し暑い夏の最中だということに汗一つかいていない。涼やかな表情だった。

「い、いつたいなにが」

「失礼ミスター。探し物をしていました。ご心配なく、通りすがりの牧師ですよ」

冷めるような知的なブルーは、悠然と津野を見下ろしていた。金髪碧眼なんて間違いなく日本人じゃないが、流暢な日本語を喋っている。

驚愕でうまく言葉を発することができない津野をどう思ったのかは知らないが、しばし津野を観察していた男はぴつと津野の手の中にある紙を指差した。

「そう警戒しないでください。私は貴方が手に持たれているその紙を探していたのです。ですが、貴方はお困りのようだ」

カツコツと汚れ一つない靴で歩み寄り、津野の前に立ちふさがる。笑みは柔和で物腰は穏やかなはずなのに、なぜか抗い難い雰囲気があった。知らず唾を飲む津野に、男は紙切れを指差した。

「富や名声を得たくはありませんか？」

突然そんなことを言い出したのだから目を白黒させて聞き返した。

「と、富？」

「ええ。なにかお困りのご様子でしたので。もしかしたら力になれるかもしれない」

「は・・・なんだ。新金のサラ金か？それに名声だって？あんな、宗教の勧誘かい？」

がつくりと肩を落とす津野にほう、と男がつぶやいた。

「そちらの入用でしたか。ならば、私は少しばかりあなたの力になれそうだ」

「力になる？なんだい、金でもくれるってのか？タダで？」

「私自身はあなたに差し上げられるほどさして裕福ではありません。牧師というのは清貧な生活をおくる者ですから、蓄財などはさほどないのです」

「はあ・・・それはそれで羨ましいことだよな。あんたにはリストラなんてないんだもんな。宗教法人がかげりや税金だって免税される。酷い差だよな」

「世の中とは総じて不平等なものです。人が落差など関係なく平等になれるなど、死んだ後くらいでしょう」

「・・・なんて牧師だよ」

津野は苦笑した。とんだ牧師もいたものである。

「それで、いったいどうやってたらあなたは俺の力になってくれるんだい。魔法でも使って金でも用立ててくれるのか？」

「魔法。なるほど、良い線についている」

この風変わりな牧師に付き合ったところで、状況が変わるはずがないのは津野とて理解している。そんな幸運なんて訪れるものじゃないし、そもそも幸運が津野に味方しているはずだったら会社に勤めている20年間の間に宝くじなりあたっていたらうし、会社を

クビになどならなかった。

牧師は爪の先まで手入れされている人差し指で、紙切れを指差した。「それをお使いなさい。あなたの望むだけのものを用意だててくれるでしょう。それとも夢でも追われますか？音楽を愛し、賞賛の工ルを望まれますか」

ぎくりと肩をすくませた。今度こそ、大きく口を開いて喘ぎ、食い入るように男を見つめる。

「なんで・・・知っ、て・・・」

津野は過去バイオリニストだった。劇団にも所属し、披露できるだけの腕前を持っていた。

だがバイオリニストなんて響きは良くても、劇団に所属しようが常に面に立ち続けられない限り、食っていくのは難しい。結婚を期に諦めた津野の過去だ。

「さて、なぜでしょう。ともあれ・・・それはあなたにとって役立つものだというのは、神の御名に誓いましょう」

「そんな、うまい話。大体あんたに何の得があるんだ」

「強いて言えば、私は仕事を依頼しているのですよ、ミスター」
仕事、という言葉には今度こそ津野が食いついた。切羽詰っている身である。いくら胡散臭そうでも藁にでも縋りたい気持ちだったのだ。

「実験に協力して頂きたいのです。危険なことなどないし、非合法でもない。付け加えるのなら堂々と表を歩けぬようなものでもありません。付き合っていたたく報酬が、あなたの望むものです」

「そいつは・・・いつたい・・・」

男の薄い唇から発せられる言葉は、救急車のサイレンの音にかき消された。

津野は大きく目を見開き、腕にちからを込める。通り過ぎる雑踏は

公園で交わされる2人の会話など気にも留めない。

「・・・」

「信じる信じないはあなたの判断に任せましょう、ミスター。気が向かれたのならご利用ください」

一陣の風があたりをひとなでしたとき、すでに津野と男の姿は消えていた。

二護遠子の両親に関する記憶は、八割がた悪夢と変換される。

夢というものは、思い出したくない記憶を再現させることが多い、というのが二護遠子の意見である。他者はどうあれ、見るものにとつて苦痛でしかないのであれば、そう零すのも無理なことだった。故に、二護遠子にとって過去の夢は悪夢というイメージでしか他ならないが、この日は珍しく違う形で再現された。

珍しいと、脳のどこかが懐かしい風景を前にして感傷に浸らせる。まだ11歳。子供の頃の風景だった。

いいか遠子と父と母は畳に座す娘を前にして、厳格さを湛えながらこう言った。

「二護の役割は、様々あるとは常々お前に教えてきた。だが、何よりも重要なのは五条の御当主を……いや、お前にとっては深森みもりさまの手助けをして差し上げることだ」

口を酸っぱくして、何度も何度も教えたものだ。

「五条は守らねばならぬ存在であり、同時に私たちの守護役でもある。けれど遠子、勘違いしてはいけない。確かに私達は五条に仕える者だけれど、唯々諾々と従うだけの愚者ではないのだから。間違いを犯そうとしたのなら諭し、愚行を行うのならば止めて差し上げなさい。私たちは、そうやって互いを律し合うことで成り立っている

るのだから」

はあ、と間の抜けた返事をした。その後、母の目が厳しくなったのを感じ取り威勢の良い返事でしつかりと頷いたが、正直なところ話の内容が難しすぎてなんとなくでしか理解できなかった、というのが遠子の感想だ。このときはそんなことより外に遊びに行きたい、と考えていたはずである。

もちろん、父はそんなことも見抜いていた。ふと目が和らぐと、遊びに行っておいでと娘を送り出した。いつてらっしゃいと、祖父母は笑っている。

これが、家族全員が揃った最後の光景である。

夢の中だと知りつつ、ぼんやりとやっぱ悪夢かもしれないな、と思っただ直後で。

光景は一転する。第三者視点から打って変わって、遠子は自身の目でそれを見据えていた。

泣くことはなかったのは、状況がうまく理解できなかったに他ならない。

先日から家が騒がしかった。

母は帰ってこなかった。

父は思いつめた顔をしていた。

祖父は歯を食いしばり正座していた。

祖母は沈痛な面持ちで遠子の頭を撫でていた。

翌日、遠子はいつもどおり学校へ行った。違ったのは、父と祖父母が玄関まで見送りに来てくれたことだろう。昼になると、親戚の叔父が学校にまで迎えに来た。厳しい顔だったのを今でも覚えている。

連れて行かれたのは自宅ではなく、近所にある本家だった。誰も遠子を見ようとせず、話しかけようとしめない。これは大変なことになったと、子供心に遠子は青ざめた。裏手に捨てた赤点のテストが見つかったのかと思っただのである。

謝らないと、と思った。だから、「ここにいなさい」という叔父の言いつけを破って遠子は家に帰ったのである。

走って走って走り抜けた。今思えば、なにをそんなに焦っていたのだろうか。子供心に、テストなんかではなく、もっと大変ななにかがあったのだと感づいていたのかもしれない。

家の前には遠い親戚の大人がいた。彼らの間をくぐり抜けられたのは、奇跡に近い。

その先で見たものは十二年経った今でもこうやって夢に出るのだ。

二 護遠子はその日、家族全員を失った。

「おっお」

汗だくの身を起こし、がりがりと頭をかいた。茶がかつた髪がゆらりと揺れ、肩をくすぐる。邪魔にならない程度の長さだが、汗で濡れた体には気持ち悪い。

時刻はAM11:00。普通だったら寝坊という時間だが、彼女にとって起きるには少し早い時間帯だ。

「っちい・・・ああ、またか」

一人暮らしをしていれば、独り言が増えるようになるというのは独り者の共通論だ。

枕元に転がっていたコントローラーを操作して、ゲーム機の電源を落とす。昨夜ゲームしながら眠りに落ちたらしい。画面の向こうのキャラクターはテレビの電源と共に姿を消した。

「ああ・・・熱暴走は勘弁プリーズ・・・」

蒸し暑い都心の夏。何度目かも知れない寝落ちに、これまた何度目かしのれない眩きを漏らす。似たような形で酷使したいせいで、先月パソコンを壊したばかりだ。エアコンの買い替えを検討している身として、次こそは寝落ちはやめねばならない。これも数十回ぐらい誓っている事実からはあえて目をそらして、頼りない足取りで風呂場に入った。

汗を流し、着替え終わると室内を見渡した。ソファに脱ぎ散らかした服や上着がかけられ、昨日食べた食事の皿はそのままになっている。40型という無駄に大きい液晶テレビの前には寝室と同じ型のゲーム機本体に、大型スピーカーまで配備されていたりと至れり尽くせりだ。

お世辞にも綺麗とは言えない部屋であるが、唯一違和感を覚えると

すれば部屋の広さだろう。一家族が優に住めるであろう4LDK、一部屋に3、4階分上下に使用したロフト付きマンションの部屋の主である。

もちろん、ローンではなく遠子の持ち家である。遠子が買ったわけではないが、それでも23歳の若さでマンション一室の主というのは、世の若者だけではなくマイホームを夢見るお父さん達から羨ましがられるだろう。

だがそんなものは遠子の知ったことではない。冷蔵庫から麦茶を取り出すとパックにそのまま口付けて、ごっくごっくと豪快に飲み干す。

冷たい飲料水が喉を通ったからなのか、ようやく無駄な悪態をつくことをやめると、指でくるくると髪をいじくる。三日月に似た眉をしかめて唇を尖らせた。

そうすると、元々顔のつくりは良いだけに、どきりとさせるような蠢惑の色が加わる。十人に聞けば全員が可愛いと思うような容姿だった。

見渡すのは、もちろん散らかしまくった室内である。一人身である以上この惨状を作り出したのは遠子に他ならないが、これを片付けようという殊勝な考えは浮かばないらしい。

携帯をいじり、メールを確認する。一通のメールに目を通すと「お」と声を上げる。

「ふーん」

しばらく考え込む様子を見せると、出かけ支度をした。

七部丈のパンツに、ボーダー柄のチュニックとサンダル。財布と携

帯だけをポケットに突っ込んだ格好は、そこらのコンビニに行こうかという装いだが、電車に乗って向かった先はスーツ姿のOLやサラリーマンが行き交う雑踏だった。日が暮れてからが本番の繁華街の一角を迷うことなく進んでいく。

入ったのはいかにも寂れたゲームセンターで、無秩序に垂れ流される電子音の洪水と安っぽい椅子と看板が入りにくさを強調したが、遠子の目的の人物はここにいる。

「片目」

目的の人物を見つけると、隣の椅子に腰掛けた。片目と呼ばれた金髪頭の青年は体全体を画面に向けている。ボタンを連打する指と丸めた背中。シューティングにはまったく興味がない遠子が見ても、相当の腕前だと一目でわかる。

「おう二月。あんたが昼間に顔出すって珍しいじゃん。どうしたのよ、何か用」

作業に没頭する目つきは鋭く感じるが、そうでなくても目つきは悪いことを遠子は知っている。TシャツとGパンという格好の細い体つき、不健康そうな顔色の金髪頭。

耳だけではなく唇にまでピアスやらアクセサリを付けている。どう見たって上から下までガラの悪い若者だった。

これが遠子が「片目」と呼ぶ青年だ。まるきりそうは見えないが、この界隈の采配人である。何故片目なのかは知らない。これが通称なのである。

「連絡いれたのあんたでしょうよ。失せ物探しあつたんでしょ」

「十二、そのこと？いいの？オレ駄目元で入れたのよ。他にも何人も受けちゃってるケド」

「いいよ。楽そうだから」

「じゃあ受けるのね。他にも5人ぐらいやってるから、早い者勝ちだよ」

「あいよ」

「でもさあ二月、あんた経験者なんだからいい加減別のやんなよ。退治系いくらあるよ」

「やだね。怪我でもしたら一大事でしょうが。昼間も夜も肉体労働したってなーんの得にもならないの」

そして「二月」というのが青年の知る遠子の名前である。本名など互いに知らないし、普段は何をやっているのかなども当然知らなかった。だが遠子は片目が采配人に成り立てからの付き合いなので、気安さはそこから生まれている。

「依頼人はガイジンだった。初顔みただけで金払いはよさげだったなあ。ホントに失せ物かは知らねえけど。そうそう、聖典つつう真っ赤な表紙の本だと」

「聖典ねえ。いかにもな名前だけどさ・・・中身は？」

「しらね。そこまで言わなかったのよ。へブライ語とかそーゆーのじゃね」

そもそも、聖典という名前の割に真っ赤な表紙というのが胡散臭い。

「都内にあるのは間違いねえんだと。元々の持ち主らしいが、間違いで日本に流出しちまったんだとき。ホントなら古本屋とかにあるのかね？まあ見つけ出したらここに電話してよ。今回は依頼人から払うからさ」

ぴっと携帯番号が書かれたメモ帳を渡すと、指は再びボタンへうつた。

「名前はエドガー・ブラウンフェルス。ドイツ人のバイヤー。．．．ま、偽名だよな」

「なんで？」

「愛想がいいからドイツっぽくねえ」

「．．．偏見だなあ」

ドイツ人を知らないの、なんとも言えないのだが。ともあれ偽名だろうが遠子には関係ない話だ。報酬額を再度確認して帰ろうとしたのだが、片目に呼び止められた。

彼の携帯が鳴ったのである。遠子との会話には見向きもしなかったのに、着信音が鳴った途端レバーから手を離し携帯をいじった。

哀れなゲームオーバー音が響く中、「なあ」と遠子に話しかける。

「二月、ついでにもう一つ仕事受けてよ」

「同時進行？冗談でしょ。やらない」

「最近廃ビルに出現してる妖を払うだけ。情報もあるよ、寺から封印が解けて逃げ出したんだって。元は危険な旧鼠だったらしいけど、今は相当弱ってるっぽい。ちつと安いけど、これ楽じゃね」

楽、という言葉に遠子が興味を示した。瞳がきよときよとと空中を彷徨い、片目へうつる。

「場所は？」

「新宿」

「じゃ、ついでにやるか。こっちの支払いはいつも通りよね」

「よろしく。だけどアレだね。二月、あんた楽とかそういう言葉に弱い癖はどうにかした方がいいよ」

「いいじゃないの．．．けど片目、若すぎて誰からもみそつかす扱いだっただ君をはじめっから取り立てていたのは誰よ。わかって釣ろつというのは問題じゃない？どついう魂胆かなあ」

「感謝してるよ？」

「五割ぐらい楽つつつて面倒くさいの押し付けるけどね」

「実際仕事の内容まではオレわかんねーもん。オレはただの采配人お仕事配ってなんぼの役目なの。依頼人の秘密まではわかんないし、危険かどうかは自分で見極めてよ」

「わかってるわよう」

「オレより先輩なんだからさあ、そのぐうたらどうにかしたら？オレだかららく々な内容選んであげてるケド、他じゃこうもいかないでしょ」

「その分、勝手に差し引きしてるのも黙っててあげてるでしょ？」

押し黙った片目に、自分の通帳内容に気づかないわけがないだろうにと言うニュアンスを含んだ視線を投げる。

片目の紹介する仕事は、これでも他の采配人と違って良心的だ。少なくとも値段に見合った仕事を紹介することが多いし、遠子はお世話になったことはないが、依頼内容に齟齬があればご丁寧に事後処理も引き受けるらしい。

見た目と違って仕事熱心な青年なのである。

「・・・そいや、珍しく昼前に来たけどどうしたわけ。二月の活動時間は午後から夜、もしくは夕方から朝にかけての夜行性じゃなかった？」

「シツレイな。たまにはわたしも早寝早起きぐらいするとも」

「あっそう？こないだ新作MORPG出たって喜んでたからさ。

てつきりまた寝落ちまでやりこんでたかとさ」

「む」

片目は皮肉っぽく口元を歪めたが、思い出したように遠子に質問した。

「思い出した。二月、あんた最近ネットは見てる？」

「妖狩の方？それなら・・・見てない」

最近は昼の仕事以外の時間はずっとゲーム漬けだった。当然チエツクなどしていない。

片目の言うネットとは、片目のような生業の仕事を行う情報提示サイトのことである。昨今インターネットの普及に伴い、大幅に仕事請負のスタイルが変わってきた。

ただし、その内容は依頼者と顔を合わせなくなったり、例えば宅配人に仕事を断られた依頼人とか・・・つまり相当ワケアリの人も多い。

受けたのはいいけど、依頼主との争いも多いという事情も多発していた。

「なに、なんかあったの」

「あそこの依頼で人体変異ポゼッションがあったんだと」

「ガセじゃなくて？」

「いや、マジ。ソースは中央の爺さんだから間違いない」

「珍しい。内外どっち」

「外からの持ち込みだろーね。こっちじゃ大きなカミサマや禍神が出たら神職連中が黙ってない」

遠子が興味深げに身を乗り出す。

離れて見ると、若い男女がこそこそと内緒話をしているようだけど、実際は甘ったるい単語なんて一つも交わされていない。もし誰かが2人の会話を聞き取ったとしても、首を傾げるだろう。

片目の言うポゼッションとは、日本語でいうと「憑依」というもので、日本じゃ狐憑きとか、悪魔憑きとか言えば通じやすい。

世界中で多発している心霊現象の大多数は、その人間の周囲で騒音を起こしたり幻覚を呼び起こすオブゼッションと呼ばれるものだが、

ポゼッションはその名の通り、人体や動物といった肉体自体に憑依するものである。

代表的なものとして、本物の悪魔払い監修の元に作られた映画がそうだろう。

昔から日本でもポゼッションがなかったわけではないから、そうそう驚くことではない。驚愕すべきは、片目の言った「人体変異」の下りである。

通常見かける憑依ぐらいでせいぜい、憑依体がトランス状態になったり神を罵倒したり、意識をのつとられる位なのだが、これが人間の体を変質させるとなる話は違ってくる。

この域になると憑依しているのは上位悪魔になってくるから、並の術者では対抗できない。

また日本には古来より妖怪というあやかしも存在するが、こちらはまた悪魔とは別のものである。

「それ、解決したの？」

「残念。逃げられました」

「うっわあ・・・」

「上級悪魔じゃないかって噂だね。ポゼッションを行ったって事は、どっかの馬鹿が悪魔召還でもやったんだろうけど、誰がどうやって行ったかってのは知らないよ。悪魔に会いたくなかったら二月も気をつけなよ」

「この広い東京二十三区で、そうそう悪魔に会ってたまるか。どんなに低い確率だと思ってるの」

「だよー」

「面白い話も聞けたし、わたしも帰りますか」

「ま、せいぜいがんばって」

片目はひらひらと手を振ると、メールをぼちぼちと打ってどこかへ送信する。

儲け儲け、とちいさくつぶやくと財布から100円を取り出してゲームを再開した。

一方ゲームセンターを出た二護遠子は鼻歌交じりで自販機の前に立っている。ポケットから小銭を取り出し、片足をトントンと動かしながらジュースを選別していた。思ったとおりずっと簡単そうな仕事だったので、上機嫌だったのである。そんな遠子の背後から、だぼだぼの服を着た軽薄そうな若者が声をかけた。

「ねーねーカノジヨ、今一人？」

「うん？」

振り返ると、若者二人が遠子の顔を真正面から見据えている。

まだ若いだろう。高校生かなと、いかにもなにもわかってない風を装い小首をかしげる。

「ほら、俺の言ったとおりじゃん」

「やっべ。可愛いな」

可愛いとはこれはまた正直者だ、と自販機のボタンを押した。遠子は自分の容姿を謙遜するほどの性格ではなかったし、一応そこそこ悪くないのだと認識している。

「うーん。ごめんねえ。お姉さん急いでるから」

が、相手が好みかどうかは別である。

さっさとオレンジジュースが入ったペットボトルを取り出すと、颯爽と歩き出す。癖とは無縁の茶髪が風に揺れてふんわりと肩をくす

ぐった。

スタイルも悪くないし、すれ違った男が目を引かれる、文句なしの八頭身美人である。

少なくともお日様の元、明るく元気に普通の服を着ている分にはそう見える。

さて、それはともかく遠子に軽くあしらわれた若者達はばかんとしていたものの、簡単に諦めはしなかった。

二人顔を見合わせ、待ったと声をかけようとしたところで・・・二人同時に躓いた。

何も無い平坦な道である。派手に転んだ若者二人はハテナ顔になりながら身を起こしている間に、目的のカノジヨの姿は雑踏に紛れていなくなっていた。

「ありがとうございましたー」

一人でぶらりとしていたときは打って変わった遠子の声が店内に渡った。重ねて、複数の女性の声も一緒にレジを終えて出て行く客を見送っていく。

「二護さん、手え空いてたらこれ運んでー」

「いま賞味チエック中、無理でーす」

同僚からのお願いをにべもなく断って、棚に細々と並んでいる袋を一つ一つひっくり返しては、細かい文字を見とって、手に持ったシートに記入していく。

この手の作業は、数字が段々と別の記号に見えてくるから不思議だ。目元を親指と人差し指でぐいぐいと押してから続きを始める。

時給を5円上げるから！と頼まれた仕事なのだが、まったくもって割に合っていない。

お昼から夜にかけて販売のパート業に精を出す遠子は、傍から見ても可愛かった。ちょっと見、若い女の子が困り顔しながら作業しているだけでも無遠慮な男は声をかけてくるものだが、これが顔良しスタイル良しの女だったらなおさらだ。

遠子は高確率で男性から声をかけられることが多い。販売員は全員女性だけ、遠子のような女の子は過ごしにくいだろうと思うだろうが、これがまったく逆だった。

「それ後にしてよ。二護さん若いんだから、お姉さまを労わって！」

「えー。スプーンより重いもの持ったことないからそんなのむりー」
「あなたいっつもワインケース運んでるでしょ」

はじめの内はともかく、現在では「二護さん、外見はいいのにな」と言われたり、遠子の性格を知った店長曰く「黙っていれば外見はカワイイのに口を開けばがっかり女子」。

随分言われ放題だが、遠子も遠子で遠慮なく言っているからお互い様というものだろう。

女だらけだからヒステリーもあるし、当然人間同士、喧嘩もある。それでも口論した数時間後にはお互いケロツとして帰るし、飲み会じゃでろでろに酔って男も真っ青な酔っ払い集団と化す。そういうところだから、ある程度は配慮が必要でも、細かな遠慮なんてしているだけ無駄なのである。

「二護さん、いつものおじさんまた来てる」

「うわあ。裏いきます」

「はい。もてる子は大変よね。いい加減彼氏作ったらいいのに」

「出会いが！出会いがないんです・・・！」

「なに言ってるの。あるじゃない店でたくさん」

「好みじゃないもんやだー」

「わがままねえ」

ちなみに遠子は男嫌いではない。かといって物好きすぎるほど好きというわけではないが、部屋の惨状を見る限り、その方面の期待は薄い。

ともあれこのように、遠子にとってはなかなか居心地のいい職場である。このご時勢、なかなか正社員というのはありつけないし、ありつけたとしてもっと良い稼ぎ方を知っている遠子としては、どちらを取るといえば明白だ。

仕事帰り、片手で肩を揉みながらとぼとぼと夜の街を歩く。気持ち的には楽な職場だが、休憩以外はコマネズミのように働かされるから、体がついていけずやめる人も少なくない。

家賃はない分、生活費はいくらか楽をしているが遠子には趣味が多い。趣味を楽しむため、そして老後の為という将来を見据える現代の若者らしく、遠子はもう一つかけもちの仕事を持っている。

乗換えをして電車を降りると、ビル街から離れてしばらく歩く。

静まり返った住宅街に入り込むと道ながら歩いていたのだが、途中寂れた公園に立ち寄ると、きよろきよろと周囲を確かめる。誰もいないと再確認すると、腰元のポーチから四角く折りたたんでいた地図を取り出した。

同じく取り出したのは、ボールペンである。もによもによと小さくつぶやくと、立てていたペンから指を離す。

「移動してない？・・・殊勝な子ネズミちゃんだねえ」

視線の先は、広げた地図の上に倒れたボールペンの方向である。よく見るとその先には赤マーカーで囲んだ丸がつけてある。

ここが遠子の目的地だったのだが、遠子自身は拍子抜けしたみたい
に目を丸くしていた。

ナニがなにやらさっぱりわからないかもしれないが、これが二護遠子のもう一つのお仕事である。遠子は片目からの仕事で、旧鼠というその名のとおり鼠の妖怪を探しに来たのだ。

雑誌やテレビの一部で騒がれていた1999年の人類滅亡というイベントも起こらないまま、いまや西暦は2000年をとうに過ぎた。そんな時代、霊がいるのかとか学者が騒いだりと、妖怪なんて本当にいるのかっていう現代だけど、これが意外と残っているもんなのである。

急激に姿を減らしているのだが、日本の八百万のカミサマやあやか

しはまだまだ残っていて、そういう妖怪がやらかすのが、得体の知れない事件だったりするわけだ。得体の知れないというか、つまりはオカルト事件である。

こういつた事件の扱いに長けているのはイギリスなどの諸外国ってイメージで、オカルティズムが比較的浸透している。専用の機関も存在しているが、日本はそのテのものにはまだまだってところが実状だ。

傷害事件など起きてても後手に回ることが多く、手が出しづらい。そこで出番なのが、遠子のような無所属の拝み屋である。

遠子は、失せモノ探しや人探しがメインにして、仕事によっては不浄所のお払いだとか、妖怪退治だなんてものもやっている。最近ではネットの普及で妖狩あやしがりなんて名前もついてきた。二月のHNもそこで使っている。

H・Nを使う理由だが、これにはいくつかワケがある。まずは遠子のように本名を知られたくない場合だ。先にも説明したがネットの普及の折、当然本名を使うのは個人の情報が漏れやすい。広いようで、実は狭い世界である。

妖狩をするということは、当然後ろめたい仕事もある。呪殺や呪いなんてものもあるから、商売敵からわざわざ呪われようという馬鹿はいない。まあ呪殺返しというのも色々あるのだけれど、だからってフリーで活躍する人間がわざわざ名前を教えようなんてことはないし、一昔前ならともかく現代はこれでやっていけたりしているのだからこだわる人は少ないってことなのだろう。

次に、単純な話で上から睨まれたくないというのが挙げられる。

さつき日本はオカルティズム事件対策が追いついてないといったけれども、それは国の対応って話で昔っからその手の方面で活躍している大御所はいくつも存在している。

ここに關係している陰陽師や術師も多いから、できれば係わり合いになりたくないってのも多いのだ。そして遠子の場合は、こちらの方面に知られたくないっていう意味合いが強い。

てきぱきと地図とボールペンを仕舞い込むと、遠子は再び歩き出した。先ほどまでと違い、桜色の唇をとがらせている。どうも標的が移動していないことが気に掛かるのだ。

旧鼠というのは、その名前の通りネズミの妖怪だ。鼠が年月を経て成ったものと言われている。

種類はそれこそたくさんいるけれど、今回は人に害を成していたおかげで寺に封をされていた危険なものだった。それを先日誤って封を解いてしまい逃げ出してしまったというわけだ。

長年の封印にわたり旧鼠はほとんど弱っているが寺は再封印するつもりはないらしく、できれば退治してほしいというのが住職の願いだった。

妖怪というのは馬鹿じゃない。その生まれは自然から成ったもの、人の想いから成したものの、動物が姿を成したものとイロイロいるけれど、ある程度生きていれば知性も高く、人の言葉を解することだって可能なはずだ。

逃げ出したという自覚がないはずはないし、だとすれば追っ手を待ち構えていると考えた方がいい。

ともあれ待ち構えているならそれはそれで対処するしかない。

ふわぁ、と大きく口をあけてあくびをしていたが、目的地を前にすると今度こそはつきり不機嫌になった。

「なにコレ」

寂れた廃ビルである。5階建ての屋上付きコンクリートで、広い土地の間にでんと立ち構えている。

廃棄されてしばらくたつてるのか窓とかはないけれど蔭がコンクリートを這っていたり、どこかの悪ガキが描いた落書き効果も重なって、日中でも入るのを躊躇いたくなる演出を作り出している。

もっとも遠子は廃ビル自体に不快を示したわけではない。

妖怪が逃げ込んだ以上、場の痕跡というか、雰囲気が変わってしまったことはよくある。だけど遠子の琴線に触れたのは、弱った妖怪一匹にしてはちよつとばかりその気が強すぎるってことだった。

「あー……めんどくさいことになった気がする!」

髪がぐしゃぐしゃになるのもおかまいなしに右手で頭を搔くと、廃ビルの中に身を投じた。

1章 あやかし退治と？ 【四】

「っと、ほっ、よっ、ほあた！・・・っおおおお！？」

冗談みたいな掛け声を上げながら、遠子がビル内を疾走している。遊んでいるように見えて、その実本人は必死だ。

着地した遠子が再び跳躍した瞬間、さつき着地した場所に、鋭い爪痕が走った。

（洒落にならん！）

鉄筋コンクリートがスポンジよろしくあっさり抉れてしまっているのだ。追撃は止まず、休ませるつもりもないのか容赦なく遠子を追いかける。遠子がひーひー言いながらビル内を駆け回っている理由はコレだ。

おどろおどろしたビルの奥へ進むと、旧鼠はあっけなく見つかった。暗闇の中、靈感がない一般人でもおかしいなって感じるレベルの異様な気を発していれば、専門家の遠子なら一発で見抜けるってものだ。

大きさは猫ほどじゃないが、普通の鼠の三倍はあるだろう。目を赤くにごらせてぎよる！と侵入者を睨みつけると、爪を立てて毛を逆立てた。遠子が後ろへ跳びずさったと同時に、旧鼠は襲い掛かってきたのである。

「ちょ、つと!? あんたいきなり過ぎない!? 人の話もちよつとぐらい!」

走っていた遠子が、ぱつと床に伏せる。頭があつた位置を通り過ぎたのは、コンクリートの塊だ。どうやら尻尾で掴んで投げらしい。

「便利な尻尾ね! でも羨ましくはない・・・ってあぶなあ!」

体を起こし、再び脚を動かす。

視界の隅に階段を見つけると、三段越しで駆け上がり角を曲がった。同時に、すぐ横にあつた扉のない空き部屋に飛び込んだ。転がりながら腰に差し込んでいた名刺を取り出すと数枚後ろに放り投げる。名刺がバチツと白い稲妻のようなものを帯びる。すると遠子の周囲を囲み、空中に浮かんだ。

間一髪の差で旧鼠が姿を現したのだが、わずかに停止しただけで素通りしてしまった。まるで遠子が見えていなかったようである。

息を押し殺していた遠子は、旧鼠の姿が見えなくなると安堵の息を吐いた。ダッシュで走りまくって汗だくだし、息も荒い。運動神経はよくっても、スタミナには縁がない遠子である。ずるずると壁に背をついた。

で、なぜ旧鼠が遠子を無視したかというと、やっぱりこの名刺のおかげである。不思議現象、マジックと思えそうだけど、れっきとした陰陽道に関係した二護の家に伝わる術技なのだ。

といつても、遠子の家なりのアレンジが加わっていてそんじょそこらの札術とはワケが違う。遠子の姓である、二護は1000年は続いている由緒ある家つてやつで、こういつた仕事を生業にしてきた。

んだけど、古い時代にはこだわらず他流派の技術も貪欲に取り込んできたので、ちょっとは珍しいかもしれないとは本人も思っている。尤も、かなりアレンジが入ったのは遠子の父の代からだ。じゃなき

やお札代わりに名刺を使うなんて、現代の若者にとっては便利なことも、昔から札術に慣れ親しんだ年寄りにとっちゃ無粋この上ない腰のポーチから、裏にびっしりと爺さん婆さんぐらいしか読めないような古書文が書かれている名刺を数枚取り出して、顔をしかながら小声で愚痴愚痴言い出す。

「なによあれ。正気保ってないじゃない。弱ってるなんてウソもいいところだし」

もう一つ、取り出したものがあつた。取り出したというより、はずしたと言うべきか。

上着を持ち上げて、ベルト代わりに幾重にも巻いていた黒い紐をすべて取つたのである。2、3mはありそうだった。両先端には三角形の金属が繋がられている。小指ほどの太さのないそれを、動きの邪魔にならない程度にぐるぐる両手に巻きつけると息を整え立ち上がった。

「でもま、お仕事だしねえ」

とか言いながら、目は憎々しげにある一点を見つめていた。

ぶに、と指でお腹を一つまみする。遠子1人のはずなのに、なんともいえない空気があたりに流れる。

寝転びながらポテトチップスをつまみ、ジュースを飲む。片目の言つてたことは正解だ。新作MMORPG ネットゲー に遠子はハマった。

ついでに言えば、熱中しすぎて夜の仕事をさぼつたツケでもある。

「・・・今宵のわたしは一味違う。活目せよ鼠風情が。このわたしを怒らせたこと、後悔するが良い・・・だから落ちて！脂肪よっ！

「！」

誰かに聞かれたら絶対立ち直れない＆後々思い返して布団の上で身悶えすること間違いなしの台詞を吐いて、廊下へ躍り出た。

*

ただ、食らうていただけだ。

旧鼠。古い鼠。

元は、ただのネズミだった。小さき、素早き生き物。寺を住まいとしていた弱きものだった。

寺では坊主共が毎日経を唱えていた。軒下で、屋根の上で、ネズミはずっとそれを聞いていた。寝るときも、飯を食べるときも、ずうっと聞いていた。

いつしかネズミは経を聞くうちに、鼠となった。知恵を持ち、小さきものにはあるまじき力を持った。

寺の坊主は鼠を見て言った。「いつしかこやつは、人を食らうであろう」。鼠は人を襲わなかった。人を食わなくても餌はあったからだ。

それで充分事足りていたのに。

あやかしになった鼠は理に逆らえない。すでに動物ではない、人の世に生き、人と共に在る。いわば人の思いがあやかしのすべてを決めてしまう。

人が「こやつは人を食らうであろう」と言った。周囲はそれを信じた。

だから鼠は人を餌とした。餌とするように「成った」。長い間生き
た鼠は旧き鼠と合わせいつしか旧鼠と成った。
堅苦しい箱に閉じ込められた。餌を食えぬ、摂理に従い次第に弱っ
ていった。
目覚めと共に旧鼠は逃げ出した。腹が減っていた。
だから酷く腹が立っている。腹を満たさねば生きられぬ。自ら縄張
りに飛び込んできたのは人間の雌だった。
今度は逃がさぬと血なまこで探す。
獲物は再び、旧鼠の檻ににじり寄ってきた。

*

(完璧に正気じゃないね)

旧鼠の射程範囲ギリギリを遠子は保つ。

今度は逃がすつもりもないのか、旧鼠もいきなり飛びかかろうとは
しない。じりじりとタイミングを計りながら、同時に遠子は観察し
ていた。

通常、長い時を生きたあやかしは人語を解する。だから少しばかり
は知性というものがあると思っていたのだが、遠子から見た旧鼠は、
長年封印されていた怒りや、腹ペコで死にそうってことを無視して
も常軌を逸脱している。

(逃げ出す途中でなにかあった?)

逃げるのが手一杯だったはずだ。

力が残っていたのなら、封印が解けた際に寺の人間を皆殺しにして
いる。

「ま、いいわ。今はあんたをどうにかしましょ。あんたのお腹に収
まってあげられるほどお安くはないから、ねっ」
台詞の途中で、旧鼠が飛び込んできた。遠子もバックステップでか

わすが、最初と違うのは今度はくるりと背中を翻すんじゃないで、右手に持っていた名刺を手のひらで展開したってことだ。

アナウンサーも真つ青な早口言葉で呪を呟くと、トランプみたいに広げられた名刺が折り紙のように、勝手に折られていく。複雑な形だが、しかし素早く折れていく。

旧鼠が甲高く鳴く。させまいと、跳躍して再度遠子に飛び掛ったのだ。

無防備な遠子の肌に爪を立てようとしたとき、獲物が口角を吊り上げて白い歯を剥き出しにした。

「召喚中だから無防備になるとでも思ったワケ？」

遠子はあらかじめ左手を空にしていた。そしてその指には、右手同様名刺が挟まっている。

あらかじめ仕込んでおいた紙の裏。星型の五芒星が広がり盾となった。清明桔梗紋、いわゆるペンタグラムってやつである。

爪と五芒星がぶつかり合った瞬間、ぶわっと衝撃波の風が遠子を襲って髪をたなびかせた。

「おいで、ガロンちゃん！」

甲高く、それでいて長い鳥類独自の鳴き声。右手の傍で白い光を放っていた場所から、羽ばたきの音と一筋の閃光が旧鼠の腹を蹴った。蹴飛ばされた旧鼠は、砂埃を撒きながらコンクリートの壁を砕いて激突した。

紐を巻いた遠子の腕に着地したのは、鷲だった。全身が暗褐色の羽毛で被われた、鋭いくちばしを持つ、王者のような威厳を持った凛々しい鷲である。

これがさつき遠子から呼び出され、旧鼠の腹を蹴つ飛ばした式神である。大ききこそ普通の鷲と変わりないが、獲物を狙う猛禽類の殺気と、凶悪な爪はどんな相手にも劣らない力強さがある。

遠子が教え込まれた札術の一つ、式神だった。

式神というのは、精霊などを依り代に宿らせ、こついつては身もフタもないけど手足代わり、パシリに使ったりする術である。

二護では正統派である陰陽道を元に、様々な流派のアレンジを加えて貪欲に術を作り上げてきた。遠子でさえも今なおその改良には余念がない。

遠子が覚えている術の中でももつとも得意としているのが、依り代に式を宿らせ自在に操る式神だった。特に、ガロンのように攻撃性に溢れた式を打つことを遠子は好む。

遠子の意思に反応するかのように、ガロンが腕を離れ高速で旧鼠の元へ突進する。首の後ろを掴もうとした足を尻尾で一撃し、壁に着地した。重力の法則ってモノはこの鼠には通用しないらしい。

旧鼠が見据えているのは、式神よりも生肉である遠子だった。正気を失っていても、遠子を倒せば式が消えるって事は理解しているのだ。

ガロンに飛び掛られる前に、鋭くがった牙を強調しながら身軽にジャンプした。

「幌金縄！」

三秒後の運命を悟り、遠子は叫び声をあげる。それぞれ先端に結び付けられた三角の金属を掴ん投げつけると、幾重にも巻かれていた紐がぐんぐん伸びて、旧鼠へ向かっていく。両先端の金属はまるで意思を持っているかのようにうねり、旧鼠の脚に巻きついた。

ピイイイ！！

続いて、ガロンの爪が旧鼠の首の裏に食い込んだ。さながら全速力の車が飛び込んだくらいの勢いだったもんだから、突然止まれるわけもなく地面に叩きつけられるが、旧鼠はものともせず長い尻尾を操った。鎌首もたげてガロンの細い首に巻きつこうとしたが、それよりも先に幌金縄と呼ばれた縄が首から尻尾の先まで隙間なく巻きついていく。

くだいようだけど旧鼠はあやかしと言われる妖怪だ。

本気で飛び掛れば人間なんて軽く骨は折れるだろうし、牙は容易く

肉を貫くけれど、そんな力を持った旧鼠がどれだけあがこうと幌金縄はびくともしない。

「本物の鬼が使ってたモンなんだから、あんた程度に千切れるわけではないでしょう」

いつの間にかガロンを肩に乗せた遠子が、旧鼠を見下ろしながら鼻を鳴らした。

旧鼠をぐるぐる巻きにして放さないこの紐、幌金縄こしきんじょうと言って遠子が持っている中でも抜群の性能を誇っている、いわばマジックアイテムってやつである。長さは用途に応じていくらでも伸びるし、車が引っ張ろうが刃物で切ろうとしても絶対に千切れない。

おまけに遠子の意思に応じて自在に動くからこうやって相手を捕縛したり、場合によっては防御にも使える。

大上老君が持ってた道具って名の由来に恥じないだけの凄いアイテムなのである。

首から下を隙間なく、簀巻きにされた旧鼠はただ吠えた。

少しだけ考え込んでいた遠子だけど、結局名刺をもう数枚追加すると、バロンのときと同じように召喚をはじめめる。札が化けて生まれたのは日本刀である。

装飾もない、素っ気無い抜き身の刃である。無機物に見えるけどこれも式神で、夜刀神やつのかみという名前が付けられている。

夜刀神を逆さに持ち、腕を振り上げおろした。幌金縄の先端は柱に伸びてしっかりと固定されているから旧鼠は身動きが取れない。

表現は避けるけど、確かな手ごたえがあった。なるべく苦しめない位置を狙ったつもりだけど、幌金縄の中で旧鼠はしばらくもがいていた。

幌金縄が解けたとき、ぼてん、と転がっていたのは小さな鼠だ。傷はないけど、とつくに死んでいる。

それをポーチから取り出したハンカチで丁寧に包むと、中身が落ち

ないようにガロンの足に結びつけた。

「よろしくね、ガロンちゃん」

窓からガロンが飛び立つと、天井を見上げる。外の明かりがあるから真つ暗闇ってわけじゃないけど、隅々まで見ろって言われたら難しい。人差し指と中指で名刺を挟むと、先端からぼうつと顔の長さぐらいまである火が宿された。

けど近づけても熱くないし、名刺が燃え尽きることもない。灯り代わりになると、何故か外に出ずに上への階段を探した。

遠子の仕事は旧鼠を”払う”までだったんだけど、気に掛かることがあったのだ。

気難しい顔を崩さないまま、階段を上がっていく。これが明日仕事でもあれば迷うことなく帰ってたんだろうが、翌日は何時に起きようが誰に咎められることもなかったのだ。

「こういうのって、ホラーが定番なんだよねえ・・・ホラーゲーの主人公なんてごめんだけどさ」

なんて呟きつつも、その手の演出に定番の怖がるそぶりは皆無である。脇役を差し置いていきなり主人公なんてふてぶてしいにも程がある。

階段を上がり終えて4階に到達すると、顎に手を当てて周囲を見渡した。

あてもなく彷徨ってるんじゃないかと、一応目的があって登ってきたのだ。

それというのも、はじめ廃ビルに乗り込んだときの違和感の正体である。あやかし一匹が作り出した”場”にしてはちょっと強すぎると思っただけけど、旧鼠が死んでも背筋を走るような悪寒というか、肌をさすピリピリした感じが消えないのである。

さっき旧鼠を眺めていたとき、もしかしたらここには”何か”あった、旧鼠はそれに影響されたんじゃないかって言うのが遠子の憶測だったのだが、どうやら正解だったらしい。

廃ビルの一番奥にある広い部屋は、元オフィスだったんだろう。吹き抜ける風のなか、灯りを掲げ投げ投げると、炎が部屋の中心部でピタリと浮いて、全容を照らし出した。

「……………」

まずあったのは”絶句”だ。

遠子は言葉もない。次に、片手が口元を押さえた。目は「こりやあやばい」とありありと浮かんでいて、携帯を取り出すと電話をかける……前に、写メを撮影した。

床一面には奇妙な図形が折り重なった　　俗っぽく言えば、魔方陣が描かれている。

詳しい広さはわからないけれど、広い室内の床いっぱいである。それもちよつと見、本格的なものだ。円形を中心に三角やら四角が描かれていて、隙間を恐れるかのように日本人には馴染みのない、禍々しい文字が赤黒いもので書かれている。

壁も同様だ。図形こそないけれど、大小様々に同じ文字が描かれて、異様な空気作りに一役買っている。

血液だとしたら匂いがしたかもしれないが、鼻を不快にさせる感じはないってことは結構前に描かれたはずだ。

さながら映画でよく見る、悪魔崇拝者が作り出した悪魔召喚の儀式そのものの舞台が廃ビルの一室に移したかのように演出されていたのである。

「これは……どうしたもんかな」

普通の一般人だったら、オカルト好きでもない限りびびって逃げ出してしまいたいような光景だ。生憎一般人でもオカルト好きでもないけれど、現実的職業として耐性がある遠子が独りごちた言葉は、旧鼠のときと違ってほんのりと焦りが混じってた。

西洋魔術には詳しくない遠子だって、相当大掛かりな魔術だったっ

て事ぐらいはわかるのである。ピポパと着信履歴を操作すると、十数コール目で電話の相手が出た。

「……もしもし片目？……あ、いや、そっちじゃないって、違う違う。……いやね、言ってたじゃない。人体変異ポゼッションが出たって。それでさあ……いまちよっと面白いもの見つけたんだけどね……」

五

「あんたさあ・・・なんでこーゆーのを見つけちゃうわけ」

オカルト系事件、采配人『片目』は、無愛想な上に剃刀のような鋭い目で遠子をにらんだ。今日も今日とて、電子音の洪水渦巻くゲームセンターで仕事を采配している。

普通だったら寝てる時間の遠子を電話の連打で叩き起こした片目は、遠子がくるなりゲームの筐体から身体を背けた。いつもだったら仕事の携帯以外は見向きもしないのに、今回は別らしい。

遠子は大口を開けてあくびをした。昼はともかく、真つ当な職についてるとは言い難い上に、一人暮らしが長い遠子の生活は乱れていて、健全な社会人には顔向けできない自堕落な生活を送っている。

ゴミの日だってギリギリまで溜め込んだ拳句、前日の夜に出すような怠けぶりだ。

だから遠子は至極当然のように自分の睡眠を邪魔されることを嫌う。特に休日だと起きるつもりもない時間に誰かに起こされたりするのは最悪に近い。

「隈すごいよ」

「わたしだって好きで起きたんじゃないやい。それよかなんなの、朝っぱらから連続コール！履歴見たらきつちり3分置きとかなんて嫌がらせ！？わたしが布団に入ったのいつだかわかってんの、あんた」

「知るわけじゃないじゃないの。何時さ」

「朝の6時！6時よ！たった4時間しか寝てないってのに隈作るなつて？どうしろつてのよ！？」

「あんたがオカシイ。健全なヒトだったら起きてる時間だよ。大体二月だってオンナノコなんだから肌でも気を使って寝れば良いじゃない。今日び、小学生だって自制してちゃんと寝てるんだよ」

「じゃあ何、あんたわたしに一日中コントローラー握るなって言うの？」

「二月、前々から思ってたけどあんたオトコいないだろ」

「あ？」

ぎよろりと剥いた目玉をさらりと流す。

「言つとくけどさー。起こされたのはオレも同じなのよ。きもちよく寝てたつてのに、あんたのおかげで上は大騒ぎ。お前が報告したんだから現場行つてオレが向かわされたのよ？」

「だからさー、わたしのせいじゃないじゃん？見つけたの不可抗力だし、一応お知らせしておかなきゃならないでしょ？」

薄汚れた椅子にお尻を乗つけると、ふて腐れた遠子が桜色の唇を尖らせて首をかしげた。

この仕草、普通のオトコがされてもしたらくらくらとしちゃうかもしれないけど、不健康な顔色をした金髪頭は揺さぶられなかったみたいだ。

「で。緊急の用件でナニ？わたしは教えただけで、特に関わることはないと思うんだけど」

「大したことじゃないよ、すげー簡単な話さ。言つたら？オレも起こされたつて……だから嫌がらせ」

「……………」

「それにどうせ二月のことだから、アレのこと知りたがるじゃない。ついでだから教えてあげようとしたオレの優しさがわからない？」
理由を聞く前から、憎々しげに舌打ちした。ブラシなんか口クに通さなかつたんだらう。髪はぼさつとして、服もそこらにあつたのを適当に着ましたつて感じた。

それでも一応見れる姿なのは元の顔立ちとスタイルの良さからだらう。自堕落な生活をしてたら体格なんて簡単に崩れそうなもんだが、本人曰く「昼と夜で消費してる」ってことらしい。

「オツケー。その金髪頭、口クでもない話だつたらぶっ飛ばす」
「ほい」

足元においていた鞆から取り出したのは一冊のファイルだ。何の変哲のない赤いファイルだが、開いてみると中身は物騒極まりなかった。

前夜、遠子が発見した廃ビル・・・魔方陣の描かれていた部屋の様子の写真でびつしりと埋め尽くされていたのである。特に大きく引き伸ばされた魔方陣の写真を見て、遠子が顔を洪らせた。

「朝っぱらから見て気持ち良いもんじゃないわねえ」

「そう?」

「・・・でもやつぱり・・・素人じゃないの、コレ」

「やつぱ二月もわかる?」

「そりゃさあ。西洋魔術は専門じゃないけど、わたしが作ったってもうちよい慎重に作るわよ?見よう見真似で作りましたって丸出しじゃない」

遠子の指がなぞる先は魔方陣の写真なんだけど注意してみると、所々が歪であれ??と首を傾げたくなるところがある。素人目で見てもうなんだから、その手のものを見てきてる遠子や片目にはなおさらそう写るんだろう。

「そーなんだよねー。ケド問題はさ、その素人の魔方陣でも一応成功したつぽいってとこじゃない?」

「なんだ。やつぱり例のポゼッションと関係してたの?」

「自分から言っただくせに・・・」

「だって当てずっぽうだもん」

「・・・まあ、これだけ大掛かりな魔方陣なら関係を疑わないほうがおかしいと思うよ。現場見た二月ならわかるだろ、召喚が成功したって」

「まあねー・・・」

「どしたの。なんか急に沈んじゃって」

「いやさあ、ここまで話を聞いたらまーたこれ関連と遭遇しそうな気がしない?」

「気のせいだろ。そこまで都合よくないだろうし、だとしたら二月

は相当な強運の持ち主だね。ってかゲームのしすぎだよ、リアルにそんなもんあるわけないし。フラグでも立てたいわけ、二月は「フラグとか言ってるあんたもどうなのよ。・・・で？調べたのってそれだけじゃないんでしょ」

そう言いながら、途中で買ってきたい焼きを袋から出してかじり付く。いくら寂れてるったって店でモノを食べるのはどうかと思うけど、遠子はそんなモラルまったく気にしてないみたいだ。

わりと大きめに作られたたい焼きを三口で胃袋に収めると、二つ目に取り掛かる。

「あー・・・ナニ、興味あるの。あんたいつつも関係ないって帰るのに」

「呼び出したのあんたじゃない。わたしは寝起きを邪魔されてんのよ。だつてのにそんだけのつまらない話で帰らされてみなさいよ。

あんたは嫌がらせできて満足だろうケド、わたしは不愉快なのよ！」

意外だとはつきり目で語る片目に、三つ目の最後の力ケラを口に放り込んだ。

もっしやもっしやと顎を動かしながら言っても説得力なんて全然ないんだけど、それでも一応怒ってるらしい。

「太るよ」

「いいの、今日は動くから」

「そういつて大概の女は太るんだよね。そう目くじらたてないでよ。・・・大したことはわかってないよ。召喚された悪魔の名前程度。

アムドウスキアス・・・わかる？」

「あのさ、日本人の私に西洋の悪魔がわかるとでも？」

「最近日本人のエクソシストも多いんだと覚えておくと良いよ？

これはね、72柱の悪魔の1人で、一角公アムドウスキアスと言うのさ。72柱は知ってるでしょ、流石に」

「ソロモン王に封印された悪魔だっけ？」

「そうそう。で、順序は67番目。悪霊29個軍団を率いている音楽の才能を授けてくれるとも言われてる魔神さ」

「そのアムドウ・・・なんとかを呼び出したのがコレなわけだ」

「というのが上の見立て。向こうでも滅多にない事例だよ」

「どうすんの？」

で、突然なんだけこの片目さん。采配人ってたいそうな役職についてるわけだけど、別に個人で仕事を請け負ったりして流してるわけじゃあない。

片目は「このあたりの采配人」と最初にいったけど、采配人ってのはあちこちに分布されていて、それぞれ縄張りが決められている。

縄張りとか言うത്普通は陣地争いとか勃発しそうなもんなんだけど、少なくとも遠子はこの金髪頭の青年がそんなことで苦労している姿を見たことがない。

それも当然で、采配人達にはそれぞれ「担当エリア」が設けられている。

この采配人のエリア範囲と人事を決めるのが、片目の所属する組織の役目だ。「上」ってのは片目の上司たちのことで、腕利きの妖精たちを抱える通称「クラブ」って名前のあやかし退治専門の組織である。

担当エリアを決められた采配人達は、よほどでない限り情報共有はともかく、互いのテリトリーには不可侵つてのがオキテなのだ。

そこでひとつ気になるのが、遠子たちフリーの妖精たちもクラブの采配人たちから仕事をもらってる所だけど、遠子はじめ妖精全員達が所属してるかって言われるとそうでもない。

フリーの妖精たちはフリーのままなのだ、クラブも重々承知で依頼をおろして仲介役を務めている。ある程度の依頼を采配することで、己の目に届く範囲での妖精同士の争いを避けやすくてできるし、依頼人達の信用も得られるからだ。

そして遠子のような個人で動く人間は、比較的楽に仕事ありつけるわけである。

妖精たちと「クラブ」、互いの利害が一致しているのが昨今の形だろう。昔っながらのコツコツやってきた采配人もいるにはいるんだ

けど、クラブに押されているってのが現状だ。

片目が身を動かすと、首や腰に身に着けてるアクセサリーがジャラジャラ音を立てて揺れる。毎度ながら邪魔じゃないんだろうかと遠子は思っただが、片目は気にならないらしい。

「今のところあんまり騒ぎにはなっていないからね。早い者勝ちじゃない？証拠が出ればもう少し話は大きくなるだろうケド。まっ、早くも乗り気の連中はいるよ。それとも二月も追う？」

「じょーだん。そういうのはやりたいヤツに任せんのが一番」

おもむろに立ち上がると、たい焼きの入った袋をくしゃくしゃにまとめてゴミ箱に放り込んだ。

「行くのかい」

「あんたに起こされたおかげでね。じゃあね」

「フラグ成立しないように気をつけなよ」

「成立してたまるかっ」

眠たげな目を擦りながら、ゲームセンターを出る。自動扉をくぐった瞬間、むあつとした空気が肌に触れて、遠子の顔がいつそう歪んだ。眠たい上に昨日の疲労が残ってるもんだから、なおさら気持ち悪いんだろう。

このまま家に帰って、クーラーを利かした部屋でごろごろするかと思いきや、意外にも遠子は自宅に向かうのとは違う電車に乗った。

電車に揺られながら目を瞑っている姿は仕事中のサラリーマンや夏休み中の青年達の目を引いてただけで、当の本人は視線もなんのその、目的地に着くとさっさと降りてしまった。

到着したのは大田区にある閑静な住宅街で、駅周辺意外は特ににぎわっている様子もない。ハーフパンツのポケットに両手を突っ込みながら、大通りから道を逸れていく。

着いたのは、「おおみや古書店」とかかれた文字がかるうじて読める本屋だった。

だけど本屋というにはガラスは汚れていて入るのには躊躇うし、そもそも営業しているのかと言いたくなる様な雰囲気である。廃業し

て数年経ちましたっていわれたほうが納得するだろう。

躊躇いもせず引き戸に手をかけると、すんなりと扉は開いた。

古書独特の紙と埃の匂いが鼻を突く。中はひんやりと涼しく外見からでは想像できない広さの店内では、天井まで所狭しと本が並び、時には床にまで積み立てられている。

奥に座していたのは、しわくちやで無愛想な、還暦をとうに過ぎたであろう老人だ。眼鏡をかけて、黙々と本を読んでいる。

「いらっしやい」の一言もないが、老人ががこの店主だった。少なくとも一見でない限り、店主の無愛想さに驚くこともないだろう。「赤、赤つと・・・けっこうあるなあ」

その辺に無造作に置かれている脚立も使って、店の端から無造作に本を選別していく。

タイトルと中身を確認していく遠子の目的は、もちろん先日受けた「失せモノ探し」の依頼である。

「東京に流れたことが確認されているだけ」というまともな情報もない。たかだか一冊の本をどうやって探せって話なのだが、本の種類は見当がついている。

オカルト関係事件を引き受ける「クラブ」に依頼が流れるのだから、希少価値の高い、もしくは魔術本あたりが妥当だろう。

そういったものは大抵好事家が持っているか、どこかに埋もれているはずだから、まず遠子が足を向けたのがこの「おおみや古書店」ってわけだ。

この本屋、ちよつと普通じゃ取り扱っていない品物を扱っていたりして、妖怪でも一見お断りという店である。

小汚い店と、いつ外出しているのか疑わしくなるほど常に店にいる店主。いったいいつ、どこから仕入れているのかと言うほど品揃えは豊富である。

といっても、普通の本屋においてある漫画や小説じゃない。むしろそういった類のものはここで見つける事が困難だろう。

若者だけでなくても目がくらみそうな、カビくさい本が目いっぱい

立ち並ぶのがこの古書店なのである。その品揃えは魔術本から廃版になった東洋古書と様々だ。

たかだか本屋って思うかもしれないけれど、本一冊だけで時に家をポンと買えるだけの価値があるものだって存在していて、そういうものが気軽に置いてあるんだから、このおおみや古書店の価値がどれほどのものかわかるだろう。

遠子は昔知り合いから紹介してもらった口で、比較的頻繁に利用している。自宅の漫画部屋にこっそり埋もれている一角は、ほとんどこの本屋で買ったものだ。

時間をかけて一通り棚を調べ終わると、今度は足元に積まれている本にまで手を伸ばした。遠子が手にとって置いていく「魔女^{ソルシエル}」「ソロモンの鎖骨」「黄金の宝壺」なんてタイトルの本たちは、好事家が見れば喉から手が出るほどのソロモノだ。

「ここになかったらお手上げなんだけどなあ」

結構な時間が経つてくるとぶつくさ呟きながら、無造作に後ろに手を伸ばす。ふと掴んだ薄汚れた白い表紙の本を置くこととして、なんとなく指から感じる手触りの違いに引き寄せた。

なんとというか、本にしてはなめらかさといおうか、紙の感覚ではなくもつと違うものを掴んだような感覚だったのだ。まじまじと見つめながら表紙を撫でていた遠子だが、あることに気がついた。

手の中でじわじわと白い本が、赤く染まってきたのだ。

「・・・ちよ、わっ、きもっ」

ぱつと手を離すと、本が床に落ちた。薄汚れた白の表紙がいつの間にか、血のように濃い赤色に染まっていたのだ。

ぼけっとそれを見つめていた遠子だが、触っても害がないことを確かめると本を取り、店主に顔を出すと本を見せるように腕を持ち上げた。

「じーさん、これのタイトルなに？」

「聖典」

「何文字？」

「古代へブライ語」

頭どころか視線一つ動かさず、店主が答えた。指だけがページをめくる様は、一種の異様な雰囲気をかもし出している。

遠子は小さくガツポーズを作り、ページをめくっていくと目をまん丸にした。

「ページがいくつか足りないみたいだけど」

「元からそうだった」

それも一カ所だけじゃない。パラパラと確認していくと、5、6ページは優に足りてないのではないだろうか。

ここでちよつと遠子の目が剣呑な光を帯びたのだが、すぐに元の明るい彩りに戻った。

「これいつぐらいに入ったの？」

「二十年前」

やはり本の表紙も確認してないのに、すらすらと答える。目がどこにあるのかって疑問は置いて、この店主、べらぼうに記憶力がいいのだ。店で取り扱っている品はすべて把握している。

となると、はじめっから聞けばいいと思うかもしれないが、何故かこの爺さん、客が置き場所を聞いてもウンともスンとも答えず、決して教えてくれないのである。

客商売にあるまじきことだが、古書店は爺さんの店なので、文句を言う人間はいない。というより言った猛者は、これまでがことごとく爺さんに立ち入りを禁止されたからだ。

その代わり、見つけ出したものについては簡潔ながら答えてくれる。この目がくらむ量のなかから頑張って見つけたご褒美みたいだ、とは遠子の感想だ。

「まあいいや。これちょうだい」

包み紙を持って外に出たときには、空が朱に染まっていた。

いくら大昔に猛威を振るつたアクマっていつても、現代は生きにくくなったものだ。

「ま。ルールさえ守つてりゃあんなことはねえがよ」

そう不適に笑つたのは、いつかの牧師と会話していた津野のおじさんである。

しかし、その様子はまるきり違つた。外見もそうだが、公園で落ち込み、生気もげつそりやつれていた時と違つて目は揚々と、無精ひげだらけだつた顎はきれいに剃られ、血色の良い顔色と立ち居振る舞いは豪気さすら現れていた。

身だしなみだつてよれよれのスーツから一転、シワ一つないブランド物のスーツ、腕にはロレックスの時計や洒落た指輪を身にまとつている。一見似合わなさそうなのだが、これが不思議と雰囲気と合つて見事に全てを着こなしている。

少なくとも、今の津野には以前見受けられた弱々しさが欠片も存在していない。ここまで来ると容姿自体が変貌してしまったようだった。

足取り軽く津野が出てきたのは、暗い路地の道からだった。大通りに入ると雑踏に紛れ、あちこちのキャッチが津野へと声をかける。

職がないと嘆いていたときとはえらい違いだ。

「あー・・・腹ア減つたな」

スーツの内ポケットから取り出した革張りの財布には、周囲がぎよつとするぐらい万札が詰まっている。一体どこで稼いできたのかつて話だが、蒸し暑い夏の夜、汗水流して客を呼び込もうと津野に声をかけてきた兄ちゃんについてとばかりに万札を一枚渡して、

「兄ちゃんも大変だな？これでジュースでも買えや」

とか言つてるあたり、金に対するありがたみは薄いような気がしな

いでもない。

直後、津野が出てきた裏路地あたりが騒がしくなった。周囲が思わず足を止め、ひそひそと話し声が伝染していく。誰かが「女の死体が・・・」と話していたのを耳にすると、暢気に立ち聞きしていた津野が鼻で笑った。

ゆったりとした津野と入れ替わるように、騒ぎを聞きつけたおまわりさんとすれ違う。

「人間が一匹死んだぐらいで、まったく仕事熱心だねえ」

物騒なことを呟きながら、その足で高級ホテルに入り、レアステーキを注文した。血の滴りそうな肉をナイフとフォークを使って上品に食べる姿は、このおじさんは本当に津野さんなのかって首を傾げてしまいそうである。

ドアマンの一礼を受けて出てきた津野は身なりを気にするように頭を撫で付けた。

「ふむ。しばらくこれでいくか」

その彼の視線を引いたのは、駅で紙包みを持った女を見かけたときだ。

「・・・ほう？」

にやつと笑ったのはともかく、その視線はまるで邪悪さが鎌首もたげたような危険を孕んだ、性質の悪いものだったように感じられる。津野の視線を向けられる女の容姿は悪くなかった。肩にかかる程度の茶髪が歩くたびに揺れる。端正な顔立ちは一見冷たさを備えそうだが、パツチリとした瞳が愛嬌を与えているので、可愛いと印象付けられる。そして服越しても伺えるスタイルと合ったバランスの整った身体が周囲の男共の目を引いていた。

本人も慣れているのか、気にした風もない。充分食指が動く女の容姿に目がいったのも確かだが、彼が興味を持ったのはもつと別のものだ。

幸か不幸か、女も気づいたらしい。・・・と、彼がわかったのは、実はその女がわざわざ自分から人気のない場所に向かって、気配を

読み取れるはずのない彼に対して呼びかけてからである。
油断していたわけではなくて、単純に女一人に後れを取ることのな
い自信の表れである。感心感心、わざとらしく目を丸め、顎を撫で
ながら暗闇から姿を現したのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7295s/>

ようとひとつのTRAITOR

2011年8月1日01時41分発行